

子どもと環境

田中三保子

食器洗い乾燥機

先日ラジオのスイッチを入れたら、評論家とアナウンサーが今の時代の家事について話をしてるところで、ちょうど食器洗い乾燥機（食洗機）が話題になっていた。今の機種は手洗いより水も洗剤も少なくて済み、家事が格段に楽になるといふ。そこへ、聴取者から疑問が寄せられた。自分も買いたいと思っ

ているが、食洗機を使うようになると子どもたちが食器を手で洗えなくなってしまうのではないかと心配だということであった。それに対して評論家は、今やどの家庭にも洗濯機があるのが当たり前であるように、食洗機が当たり前の時代がもうすぐやってくるであろうから、心配しなくてもいいのではないかと答えていた。確かに、今はどこにも洗濯機があるし、コインランドリーさえある。食洗機もありふれた家電製品になるか

もしれない。私もあつたらいいなあと思うときがあるし、いろいろな事情で毎日の家事の負担を軽減できればと願う人もたくさんいることと思う。けれども、先の聴取者の疑問ももつともという気もしてくる。

生まれたときから家の中には洗濯機がありそれが動くのを見て育った人たちは、洗濯ということをどうとらえているのだろうか。洗濯物を洗剤と一緒に入れてボタンを押せば機械がしてくれることと思つてはいないだろうか。洗濯機がなくても洗濯することはできないであろうか。試しに、息子に手で洗濯できるか聞いてみた。答えは、小学校の家庭科の時間に洗濯板を使ってやったことがあるからできると思うよということであった。今や洗濯は学校で習うものなのかと、これには苦笑してしまった。考えてみれば、私は今まで息子の見ている前で手で洗濯したことはなかったかもしれない。当たり前といえば言えるのであるが、現実を突きつけられた思いがした。

家事を担う者にとって、日に三度ずつ繰り返し返される

食器洗いはかなりの負担である。食洗機は遠からずかなりの家庭に普及していくであろう。そうになると、笑いごとではなく、習わなければ食器を洗えない人が出てこないとは限らない。食洗機のないところではどうするのだろうか。たかが汚れた食器をきれいにすればいいだけのことである。水と洗剤があればどうにでもなる、かもしれない。でも、ひとつひとつの食器や環境への配慮などは生まれてこないのではないだろうか。

ずいぶん前になるが、洗濯機が壊れたという人の投書が新聞に載ったことがある。仕方なく手でじゃぶじゃぶ洗濯してみたら、洗濯物がきれいになるのが嬉しくて、母親の洗濯していた姿を思い出したりもして、思いのほか充実感が味わえた。家族全員のものを洗うのは大変だけれど、もうしばらくこの生活を続けてみようかと思つているといった趣旨だったと記憶している。かつては人の手に頼るほかなかった、でも人が生きていくには必要な仕事のいくつかは機械に取って代わられ、その意味も価値も問われなくなつてし

まったような気がする。機械がするのだからできて当たり前なのであろうか。余った時間は別のことに振り向けられる。いや、別のことをするために、家事労働という生きることで基本的な行為の軽減短縮が要請されているのかもしれない。その結果、掃除、洗濯、食器洗いなどにも価値を見いだし楽しむことや人が少なくなってきたといえないうだろうか。機械に頼れなくなったときに、片手間でなく家事に向き合うときに、おもしろさを発見し味わうことができるのかもしれない（家事は毎日同じようなことの繰り返しではない）。誰がが楽しみを見つけれられるものではない（と思うが）。投書をした人は、母親が手で洗濯をしていた時代に育った人であろう。自分でも手洗いの体験を持っていたのかもしれない。でも今の子どもたちは、多分洗濯機しか知らないと思う。たいていのことが機械まかせにできる時代だけれども、子どものときに洗濯など自分で実際にしてみる体験は必要なのだろうか。それよりも、変化する環境に順応し、どん

ん進化していく機器を使いこなせる力を身につけていくことの方が求められていくのだろうか。

お年寄りの生きる力

痴呆症のお年寄りが少数で暮らすグループホームに私がかかわるようになったのは、二年ほど前のことである。そこでは、ひとりひとりが自分のペースでゆつくりのんびり暮らせることをモットーに、スタッフ（職員）が利用者（入居者）の暮らしを支え介護をしていた。スタッフは利用者の話し相手になり、買い物に行きたいといえばつきあい、桜が咲けばお弁当を用意し利用者をお花見に連れ出してもいた。そのでの時間は確かにゆつたりと流れてはいたが、生活そのものは、スタッフが家事をこなし、利用者の身の回りの世話をし、時に起こるけんかの仲裁もすることによつ



て支えられていた。そんな状況が半年ほど前から一変したのである。

きっかけは利用者のことばだったという。そこで暮らすようになって半年、一年経った頃、「ここはいいところだけど、退屈ね」と利用者と言われることにスタッフは大きなショックを受け、「ここには利用者自身が暮らしを考えるきっかけが少ない」ことに思いいたる。そして、「自分の暮らしは自分で考えるからその楽しみや大変さを感じ、生きている実感味わうもの」と感じて、「利用者に暮らしを返す」ためのスタッフの努力が始まる。大変な期間になることは覚悟の上で、「利用者が自分の暮らしを自分のものにしたその先で、ここを利用し自分で暮らすことの楽しさを味わってもらえれば」と願い、改革に取り組んでいった。

スタッフと利用者の話し合いがもたれ、まず食事作りが利用者の手に委ねられた。当番を決め、スタッフは時間をかけて利用者の作る気持ちを掘り起こし、で

きないことは手助けしていった。利用者が自分で生活しやすいように利用者の視点で環境を見直し、自分でやった方がずっと効率的なことも利用者自身が自分の力を使ってできるように、スタッフはひとりひとりの力を見極めながら忍耐強く気長に働きかけていった。利用者によっては自分で作ることが理解できずに、食べるものがなくて困惑することもあったりしたようだが、次第に長い間の食事作りの体験が呼び覚まされて、献立を考えたり、買い物に行ったり、作ったりなどが自然にできるようになっていった。今では当番制もなくなり、利用者がそれぞれ自分の食べたいものを考え、作り、時には分け合うこともあるという。それに伴い、食事作りに限らず日常のいろいろなことも、利用者自らが積極的にやろうとするようになってきている（もちろんそれぞれの持っている力、やれることには違いがあるが）。私が訪問すると、以前はほーっといすに座っていただけの人が、「よく来たね」といってお茶を入れてくれたりする。

このグループホームで、利用者の体力や能力をできるだけ落とさないようにすることを目指して取り入れられたのは、家事をこなすことであつた。食べるごと、清潔さを保つことなどは生活に直接結びつく。高齢者にとつて家事をすることは、生きることを具体的に実現することなのかもしれない。利用者のひとりには日本舞踊に堪能で、かつて人に教えていたこともあつたというが、毎日のほとんどを寝て過ごしていた。舞扇を見せてもなんの反応も示さなかつたのに、以前のように魚をじょうずに焼いたり洗濯物を干したりするようになつて、寝ている時間が減り、脚力もついでつた。

この利用者は全員女性、長い間主婦といわれる役割を担ってきた人たちである。家事は、好きかどうかは別として、機械におまかせできない頃から長年やり続けてきている。そういう人たちだからこそ、家事をすることで生活力が蘇つたのであろうか。それとも、生きることに直接結びつくような行為は、生活力を育

てたり維持したりする作用があるのだろうか。

子どもと環境

このところIT技術の進歩はめざましいようである。食洗機どころか、近い将来には、汚れの程度に応じて洗い方を変える洗濯機や、自分で掃除をしてくれるロボット型の掃除機などの家電製品に囲まれた生活が実現しそうである。人手に頼っていた仕事は機械がこなしてくれるようになり、その機械は人の考える余地を残さないほどに自動化されていくだろう。また、生活に必要なものの大半はすでに製品化されて店頭に並べられ、かごに入れてレジに並ぶだけで手に入れることができる。ひとつひとつの製品がどうやって生み出されてきたのか、知る機会はほとんどない。そういう生活の中では、自分の暮らしを自分で作っているという実感は味わいにくいのではないだろうか。暮らしを作っていくには大変さとともに楽しさおもしろさもあるはずである。「自分の暮らしは自分で考えるから

その楽しみや大変さを感じ、生きていく実感を感じ、味わう」のは、高齢者に限らないのではないだろうか。

子どもたちは、日々、周りの環境と関わりながら一杯生きようとしている。けれども、大人が自分の暮らしを作っている実感のもてない環境の中にあつては、子どもの感性がどんなに豊かであつたとしても、暮らしすることがどんなことかは感じとれないのではないだろうか。それとも、好奇心や時代の変化に応じた暮らしかたを感じとれる感性を育てていけば、生きる実感は味わえるようになるのだろうか。社会が変化していけば、暮らしのありようも変わるのだから。

幼稚園の環境を考えると、私はいつもこの問題にぶつかり悩む。いつの時代にあつても変わらない人の暮らしを支える力を養えるような環境を用意すべきなのか、それとも、時代の変化に応じられる能力や感性を育てることに重きをおいた環境設定を考えるべきかと。例えば掃除について考えれば、ほうきとちりとりできれいにするのか、子どもでも扱える掃除機に習熟

した方がよいのかどうか。

「生きていく実感」の味わいかたは人それぞれで、また、そのときどきで違うと思う。けれども、老いて最後に残るのは生きて暮らすことに伴う実感ではないだろうか。今高齢の方たちは、自分の手で自分の暮らしを作ってきた人たちである。今の子どもたちは、暮らしを作る感覚を持たないままに育っていく可能性が大きいような気がする。子どもたちが大人になるとき、いったいどんな世の中になっているのか予想もつかないけれど、自分で生活していく体験を積んでいけば、どこでも生き生きと生きていけるのではないかと、私は今と思う。食べたり洗ったり掃除したり必要なものを作ったりなどを、なるべく簡素な道具を使って、子どもたちが個々に、あるいはみんなで興味を持っておこなえるような環境を、保育者の側が意識的に用意する必要があるような気がしてならないのである。